

ちょっと ブレイク しませんか?

第 42 回 「80デイズ」(2004年 米国)

イソップ寓話に「ほらふき法螺吹」(第17回、33回でも登場)と題する小話がある。

国ではいつも、もっと男らしくやれとケチをつけられていた五輪競技の選手が、ある時海外遠征に出て、暫くぶりで戻ってくると、大言壮語して、あちこちの国で勇名をはせたが、殊にロドス島では、オリンピア競技祭の優勝者でさえ届かぬ程のジャンプをしてやった、と語った。もしもロドスへ出かけることがあれば、競技場に居合わせた人が証人になってくれよう、とつけ加えると、その場の一人が遮って言うには「おい、そこの兄さん、それが本当なら、証人はいらない。ここがロドスだ、さあ飛んでみる」

今回紹介する作品は、1956年公開の映画「八十日間世界一周」のリメイク版、「80デイズ」(2004年米国)。

1872年、ロンドン倫敦の英蘭銀行に中国人ラウ(ジャッキー・チェン)が侵入し「ひずい翡翠の仏像」を盗み出し警官隊を撒いて逃走。一方、空を飛ぶモノを発明することを夢みる発明家フォッグは何でも実験しなければ気が済まない性格で、実験台にしようとした執事にまで逃げられる。そんな時、たまたまフォッグの屋敷に逃げ込んだラウは咄嗟に偽名(パスパルトゥー)を名乗り執事として潜り込む。ラウの真の目的は故郷の村から略奪された「翡翠の仏像」を国に持ち帰ることだった。王立科学アカデミー長官ケルヴィン卿は「翡翠の仏像」が盗まれたことに激怒。仏像を使った取引を持ち掛けた中国の女将軍ファンは部下に仏像奪還を指示。ある日、フォッグはラウを伴い王立科学アカデミーに出向く。その席でフォッグはケルヴィン卿の挑発に乗せられ「80日間世界一周」を約束してしまう。世界一周に成功すればアカデミー長官の座に、失敗すればアカデミーを追放され二度と発明ができない、のるかそるかの賭けだった。そんな無謀な賭けを後悔したフォッグだが、故郷へ戻れる絶好のチャンスと確信していたラウの励ましを受けて旅立つ決心をする。旅の途中のパリで出会った画家志望のモニカを仲間に加えた一行は、オリエント急行でヨーロッパ大陸を横断しアブダビから船に乗ってインドに到着。そこで一行はケルヴィン卿が差し向けた追っ手の妨害を受けるが、ラウの機転や象の活躍で難を逃れ、ラウの故郷・中国へ到着。旧友のサモと再会したラウは中国政府に捕まりフォッグに正体がバレしてしまう。しかし、これまでのラウの貢献が功を奏してフォッグはサモと協力してラウの救出に成功し、米国大陸に向かう。フォッグ一行はSFから大陸横断鉄道に乗りNYに到着するが、ケルヴィン卿に雇われたギャングにより有り金を全部奪われ一文無しとなり途方に暮れた。マディソン・スクエア・ガーデンで拳闘のチャンピオンと対戦して4ラウンド耐えれば賞金がもらえると知ったラウが果敢にも挑戦し見事大金を手に入れ、いよいよ倫敦行きの船で大西洋横断に乗り出す。しかし、このペースでは間に合わないと判断したフォッグは帆船の相当な部分を解体し自ら発明した気球を組み立て一気に倫敦に向け飛翔する。フォッグの夢が叶った瞬間だった。その結果、約束の80日よりも1日早く倫敦に到着出来て賭けには勝ち、ヴィクトリア女王の祝福を受ける。ケルヴィン卿の悪事も暴露され、フォッグとモニカは結ばれ、ラウは無事故郷に戻ることができ、「事実による証明が手近にある時は言葉は要らない」とのイソップ寓話を具現した。

ジュール・ヴェルヌ原作の『八十日間世界一周』は、後期ヴィクトリア朝時代、英国人資産家フォッグが執事のパスパルトゥーを従えての冒険物語。本作はジャッキー・チェンの好演で抱腹絶倒の展開だ。冒険と云えば第一次南極越冬隊長・西堀栄三郎の「南極越冬記」、「石橋を叩けば渡れない」は面白い。大航海時代から五百余年、旅客機だと3日で世界一周が可能で文字通りワンワールドになった。スペースシャトルなら90分で地球一周だが、早すぎる。地球の自転は時速1700kmだが、実感は全くない。豪華客船だと百日余りで費用は数百万円、そんな暇やお金はない。やはり海外旅行は安全であれば飛行機で、現地の文化、気候を五感で堪能したい。「LIFE」に続いて世界旅行の作品紹介になったが、極め付きの旅といえば、日本地図をほぼ正確に描いた伊能忠敬をモデルにした「四千万歩の男」(井上ひさし)がある。もちろん旅行などしなくても、人は人生という旅を日々歩んでいる。



かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平
(精神科医・映画評論家)

名古屋工業大学 名誉教授
かゆかわクリニック院長